座長講評 〈午後の部〉

山下彰一（広島大学大学院国際協力研究科長、
地域経済研究センター研究員）

本日の午後の部は三つ報告がありました。それぞれの纏めは省略させて頂きますが、昨日来、ご議論頂いてきたことは、やはり中国四国の連携ということで、この議論を続けていくということが非常に重要なことだと思います。これまではばらばらに関西圏や九州圏とつながりをもってきていたが、中四国は自分たちの住んでいる所だから、もう一度見直して全体で考える方向を少し検討してみようではないか、ということになってきているように思います。そういう機運が盛り上がってきているというふうに思います。今日のお話の中では、都市機能・都市基盤の視点から柴田さん田岡さんより報告と提案がなされました。それに対して非常に印象深かったのは藤目先生が全体の調整役がいるということをおっしゃいました。そのお一人が樫本先生であろうし、またいろんな分野でいろんな方々がその調整役になっていけると思います。是非、その方向を大事にして頂きたいと思います。

この中四国の連携ということで、中国地方で主に中経連や活性化センター等で検討してきた一つの方向を申し上げさせていただきます。それは国際化という方向で中国が一体となって海外と交流し国際化を進め、さらには将来的には国際協力という方向を打ち出していこうというものです。これは、「ホスティ中国の展開」という提言になっています。「ホスティ」というのは中国の五県の頭文字を取ったわけです。広島のH、岡山のO、島根、鳥取、山口と、それを連ねてＨＯＳＴＹ中国という呼び方をしてきました。これと四国の四県の頭文字を取ったらどうなるのかと、皆さんに考えて頂ければと思います。県名でいくとテッキィということで、ホスティテッキイの連携ということで、是非そういう方向をお考え頂ければと思います。

今日の報告の中で出てきた重要な方向は、地場産業の活性化です。これは造船業を初めとした地場産業の活性化は、地元の雇用確保といった点から非常に重要なことです。しかし、この方向の検討は大事ではありますが、本日の討論者の窪川さんからは、日本が危ないのだからどこかが潰れるのは当り前、潰れる所は仕方ないというご指摘がありました。これは、そこで触れられたように、アジアとの関係で考えた時に、いろんなことが見えてくると思います。アジアの動きは活発で、特に東アジアの経済発展は目覚ましい。やはりその動きに乗っていく、またはそれを利用しながらこの地域も新しい戦略を出していくという方向が必要だろうと思います。世界的に現在は変革の時代でありますから、今のアジアの動きと連動して考えていけば、日本も変わらざるを得ないし、地域の構造も変わらざるを得ないと思います。そういうことで今後は世界中の情報を集めながら、各地域がそれぞれの方向を決めていくということが大事だと思います。

国際化の視点は、どの地域においてもこれから非常に重要でありますし、今日の報告の中ではそれほど強く出てこなかったのですが、国際空港の役割も是非お考え頂きたいと思います。今日の報告についてですが、国際化の視点が少し弱かったということと、それからソフトの視点がもうちょっと欲しかったなと私は思います。地域の活性化なりあるいは連携という時に、インフラの整備は非常に重要であります。重要ではありますがインフラ整備だけで物事を考えていくという時代は、もう少し前の発想のように私は思います。

これから何が大事かと言いますと、田岡さんの報告にもありましたが、１つは文化的な要素だと思います。それから人的な要素、これを今後は重要視して欲しいと思います。例えば高知生まれの私が広島に行ってそこで生活をしている。これで高知県の人口が一人減るわけです。これは高知にとってマイナス要因かというと、今まではマイナス要因だったと思います。私には高知で仕事しているわけではなく、母に会うために高知へ行くぐらいで、ＪＲの収入がちょっと増えるぐらいなものでした。これからは双方向で人材のネットを作られれば、人の動きが活発化するでしょう。人を人で繋いでいくという視点が大事だと思います。

連携という場合にはアクターですね、先程藤目さんは調整者とおっしゃいましたが、これが非常に大事だと思うわけです。人を繋いでこの地域の密度を高めるということが非常に大事だと私は考えます。それから人的要素を連携の核というふうに位置づけて、もう一度この地域を見直すと、結構これは捨てたものではないし、将来的に展望も出てくるように私は思います。

それからこの地域ではどうしても雇用ということが大事になりますが、雇用については窪川さんも触れられた高度情報化時代に備えて、今盛んに展開され言われているインターネットであるとか、新しい動きに早く取り組んだ所の地域の展望が開けて来ると思います。高度情報化時代は間違いなく来ますしもう来ているわけです。これは田舎にいても、大統領に直にアプローチできるといったものもありますし、地方にいて先端の仕事をする、付加価値の高い仕事をするということが可能になります。こうした動きが地元の雇用に影響を与えていきます。

将来への展望についてですが、これは高知の松尾さんの話に多少関わってきます。今後の新しいベクトルとして考えておくべきものとして、一つは未来社会を予見しながらそれを先取りしていくということが大事だと思います。今世界的に言われていることがあって、それは一つはサスティナブル・フューチャーということです。サスティナブルというのは経済的な発展を遂げながら、しかも地球環境とか生活の環境とか安全とかが配慮された持続可能な方向です。そういう方向を先取りして地域の活力を高めることが大事だと思います。

もう一つはヒューマン・ディベロプメント、先程の人的な要素に関わることです。これに関して私どもが地元で考えるべきことは、住民のアメニティということだと思いま

す。要するにその町に住んでいると非常に安らぎを感じる、楽しい、心が豊かになる、安全である、文化も豊富にある、そういう地域を自分たちで作り上げていくということ。最近の議論では「小さな世界都市」という提言になっています。ただ、この概念はまだ十分に煮詰まってはいません。要するに小さくてもそこが世界都市の条件を備えつけている、そういった都市づくり、街づくりを提案しているのです。

この方向は、何もインフラ整備だけではなくて、人の要素を柱にして、環境や文化を考える。世界の誰が来ても恥ずかしくない町作り村作りになっているということが非常に大事だと思います。生活基盤の見直しということで、それから安全とか文化をもう一度地元で見直していくことがポイントだと思います。世界の潮流となっているヒューマン・ディベロプメントの方向は、日本のように豊かな社会に住むだけではなくて、アジアやアフリカの貧しい地域のことも考える。そこに住んでいる人々の生活とか安全とかも一緒に考えて、一つの世界での共生を目指した地域づくり、人作りをしていこうと解釈できます。すこし大きなお話をしましたが、地域づくりにはこういう方向の検討も大事ではないかと私は考えています。